

母語と第2言語会話における発話ターンと相互注視の関係 Analyses of Mutual Gazes and Floor Apportionment in Native and Second-Language Conversation

馬田 一郎[†], 伊集院 幸輝[‡], 加藤 恒夫[‡], 山本 誠一[‡]
Ichiro Umata, Koki Ijuin, Tsuneo Kato, Seiichi Yamamoto

[†]株式会社KDDI総合研究所, [‡]同志社大学
KDDI Research, Inc., Doshisha University
ic-umata@kddi-research.jp

概要

次話者となる聞き手は現話者の注視に対して注視を返す、という、いわゆる「相互注視」によって会話の制御が行われているとの仮説に基づき、現話者・次話者・残りの聞き手の注視行動を母語会話と第2言語会話において分析した。相関分析の結果、母国語の自由対話と課題対話、および第2言語の課題対話においては、話者交代が起こる発話の前でのみ、現話者から次話者への注視と次話者から現話者への注視に相関がみられた。このことから、これらの会話においては、相互注視が発話順序の割り振りに重要な役割を果たしていることが示唆された。第2言語の自由会話で仮説が支持されなかった原因の一つの可能性として、言語能力の不足が考えられる。

キーワード：相互注視、発話ターン、母語、第2言語

1. はじめに

3人対話における発話ターンと相互注視の関係について検討するため、現話者・次話者・話者交替に関与しない第三者の注視行動の関係について、母語会話と第2言語会話のそれぞれにおいて分析した。会話において相手とのインタラクション調整は極めて重要であり(Clark 1996; Clark & Brennan, 1991)、先行研究において注視行動は発話ターンの割り当て(Duncan, 1972; Kendon, 1967; Argyle, Lalljee, & Cook, 1968)や会話における「基盤化(grounding)」(Clark & Brennan, 1991; Clark, 1996; Clark & Krych, 2004)において重要な役割を果たすことが観察されている。また、現話者は次話者をより多く注視している傾向にあるが、その傾向は第2言語会話では母語会話の場合よりもさらに強くなることが示されている(Ijuin, Umata, Kato, & Yamamoto, 2017)。

本研究では、発話交代場面において、こうした現話者から次話者への注視に次話者が反応して相互注視が起こっているとの仮説のもとに、現話者と聞き手の間の注視行動の関係について量的分析をおこなった。具体的には、(a)発話中の話者による各聞き手への注視時間、(b)各聞き手による発話中の話者への注視時間、に

ついてスピアマンの相関分析を行った。

2. 分析手法

日本人学生3人20組(全60人、年齢: 18-24歳)による対話を分析した(Yamamoto et al. 2015)。本分析では、好きな食べ物などについて話す自由対話と、「無人島に何を持っていくか」などを決める、いわゆるサバイバル課題会話とを対象とし、日本語会話と第2言語である英語会話における注視傾向を比較分析した。具体的には、上記(a)(b)の注視時間について母語会話と第2言語会話の傾向の違いを検討する。データ収集と処理に際して、注視行動の計測にはナックイメージテクノロジー社製 EMR-9 視線検出装置を用い、発話区間切り出しおよび発話機能ラベリングにはアノテーションツール ELAN を用いた(図1参照)。



図1 ELANによるアノテーション例

3. 話者と聞き手の注視行動の相関分析

話者から聞き手への注視と聞き手から話者への注視について、以下の仮説のもとにスピアマンの順序相関分析を行った。

i) 発話ターン交替場面の直前では、次話者は現話者の注視行動に反応し相互注視が顕著になる相互注視が

顕著になり、お互いの注視行動の相関値が高くなる。

ii) 上記以外の場面では、現話者と次話者の相互注視は顕著ではなく、両者の注視行動間に高い相関はみられない。

iii) 現話者と発話交替に関与しない第三者との相互注視は、発話ターン交替の有無に関わらず顕著ではなく、両者の注視行動間に高い相関はみられない。

分析の結果、母国語会話では自由会話・課題会話の両方において、発話ターン交替場面の直前においてのみ、次話者と現話者の間の注視行動に有意な高い正の相関がみられた(自由対話: $\rho = .737, p < .001$; 課題対話: $\rho = .737, p < .001$)。一方で、第2言語会話では課題会話の発話ターン交替場面の直前においてのみ、次話者と現話者の間の注視行動に有意な高い正の相関がみられた(課題対話: $\rho = .689, p < .001$)。母語会話、第2言語会話での注視相関値をそれぞれ以下の表1と表2に示す(*: $p < .05$, **: $p < .001$)。

	現話者から次話者への注視と 次話者から現話者への注視	現話者から第三者への注視と 第三者から現話者への注視
自由会話: 発話交代前	.737**	.096
自由対話: 発話交代なし	-.167	-.226
課題対話: 発話交代前	.531*	.026
課題対話: 発話交代なし	-.253	-.338

表 1: 母語会話での注視相関

	現話者から次話者への注視と 次話者から現話者への注視	現話者から第三者への注視と 第三者から現話者への注視
自由会話: 発話交代前	.200	.069
自由対話: 発話交代なし	-.147	-.164
課題対話: 発話交代前	.689**	-.227
課題対話: 発話交代なし	-.056	-.289

表 2: 第2言語会話での注視相関

4. 考察

現話者・次話者・話者交替に関与しない第三者の注視行動の関係について、母語会話と第2言語会話のそれぞれにおいて分析した。発話ターン交替場面の直前で現話者と次話者の注視行動間の相関が高くなる、という仮説のもとにスピアマンの相関分析を行った結果、母国語会話では自由会話・課題会話の両方で仮説が支持されたが、第2言語会話では課題対話の場合においてのみ仮説が支持された。

第2言語会話では自由会話において仮説が支持され

なかった原因は明らかではないが、一つの可能性として言語能力の不足が考えられる。すなわち、課題対話では発話の文脈が課題達成に沿う形である程度制限されているため、聞き手にとっては次発話の内容がある程度予測可能である。この予測可能性により、言語能力が不足している第2言語会話でも相手の発話を理解しやすいと考えられる。また、話者にとっても、課題達成に沿う形での制限により限定された文脈内での発話生成となると考えられる。さらに、先に述べた予測可能性によって相手の質問に対する返答発話生成が容易になると考えられる。

一方で、自由対話ではそのような文脈による制限が弱く、次発話の内容予測が難しい。このため、聞き手にとっては第2言語会話では発話の意味理解が困難となる可能性がある。また、話者にとっても、文脈による制限が弱いことから発話内容の可能性が広がるため、発話生成が課題対話の場合より困難となる可能性がある。さらに、次発話の内容予測が難しいことから、相手の質問に対する返答発話生成も困難になる可能性がある。このため、第2言語会話では発話理解・生成により多くの認知的リソースが割かれてしまうため、注視行動を調整することが困難となっている可能性がある。

上記の可能性について検討するために、現在第2言語の言語能力についてより条件統制を行なった会話の収録を検討中である。また、発話機能と注視行動との関係を検討するため、会話における発話の機能分類を進めている。

文献

[1] Clark, H. H. (1996). Using language, Cambridge University Press.

[2] Clark, H. H. & Brennan, S. E. (1991). Grounding in communication, In Resnik, L. B., Levine, J. M., & Teasley, S. D. (Eds.) Perspectives on socially shared cognition, pp.127-149, Washington, DC: APA Books.

[3] Clark H. H., & Krych, M. A. (2004). Speaking while monitoring addressees for understanding, Journal of memory and language, 50, pp. 62-81.

[4] Duncan, S. (1972). Some signals and rules for taking speaking turns in conversations, Journal of Personality and Social Psychology, 23, pp. 283-292.

[5] Ijuin, K., Umata, I., Kato, T., & Yamamoto, S. (2017). Difference in eye gaze for floor apportionment in native- and second-language conversations, Journal of Nonverbal Behavior, September, 2017. DOI: 10.1007/s10919-017-0262-3

[6] Yamamoto, S., Taguchi, K., Ijuin, K., Umata, I., & Nishida, M. (2015). Multimodal corpus of multiparty conversations in L1 and L2 languages and findings obtained from it, Language Resources and Evaluation, 49, pp. 857-882, DOI: 10.1007/s10579-015-9299-2.